僕たちの青春
薬大のクラブ活動

東北薬科大学は北海道・東北地区唯一の薬学専門学校として1939（昭和14）年に東北薬学専門学校として創設された。49年には大学として開学し、創立71年目を迎えた。剣道部は専門学校創設当初からあったそうで、顧問の佐々木健郎氏（生薬学）は「少なくとも大学として開学した時には、生薬研究室と同様に既にあり、創部70年近くの伝統があります」という。部員は10人ほどで、男女比はほぼ半々。「みな“勝ち気”な性格」（佐々木顧問）の剣道部は、この数年来、男女とも薬大系大会では優勝・準優勝の常連。５年生の阿保成慶くん（前主将）と一條綾乃さんにも加わってもらい、剣道の魅力や部活を通じて得たことなどを聞いた。

08年の第27回全日本薬学生剣道大会で男子団体戦と女子団体戦でアベック優勝

東北薬科大学剣道部
「己に克つ」スピリッツ養成

左から佐々木顧問、阿保前主将、一條さん（トロフィーの一部をバックに）

東北薬大剣道部が主にエントリーする大会は、東北学生剣道選手権大会と東北女子学生剣道選手権大会。いずれも全国大会の予選だ。このほか、全日本薬学生剣道大会があり、全国の約20校が持ち回りで主催している。一方、地域レベルの大会は、東北地区学生総合体育大会と宮城県新人選手権がある。

剣道や柔道など武道系というと、イメージ的には練習を含め「きつい」と思いがち。ただ、前主将の阿保くんは「そ～でもないですよ。結構、緩い感じ」という。

もちろん、部員の多くは、それなりに腕に覚えのある学生で、多くは10年くらいのキャリアを持つ経験者。

一條さんの場合は、中学３年間のみの経験。「レベルの高さにビックリして、口が開いたまま……。でも、案外雰囲気がよくって、居心地がよかったので」と入部。その後も「私でも結構ついていけた。強い人同士はガッツリやって、力の差がある場合には合わせてくれるので……」と語る。

成績よりも〝思いやり〟の伝承を

一方の阿保くんは「とりあえず運動が好きで、他のスポーツという選択肢もあった。しかし、他のスポーツより、精神的に鍛えられる」、それに「相手を考えることが多い」と選んだ理由を挙げる。

佐々木顧問は「一度、面を付け、剣を交えれば、人間と人間の対話。決して逃げられない、退けない。そこを精神的に乗り越えなければならない」と、剣道の本質に、心を読み合い「己に克つ」ことがあると解説する。

日常的な部活は、月、水、木の週３回が基本。午後４時半から７時頃まで、学内の体育館で練習に励む。練習メニューは、部長の裁量で決められるというが、特別なメニューはないという。「剣道では子供から大人まで、やる内容は同じ。精度を上げていくことが基本」と佐々木顧問。

具体的には素振り、面、小手。次いで面を着け、基本的な技を練習する。体が鈍っているときは、基本動作だけで終わることもある。体が慣れてくれば、相手が来たところに応じる“応じ技”などを行い、試合用の練習も加えるが、通常は、試合形式の練習はしないという。もちろん、大会前になれば試合形式の練習は多くはなる。

年間スケジュールは、５月に新入生歓迎会、東北学生剣道選手権大会、東北女子学生剣道選手権大会、６月に宮城県学生剣道新人大会、東北地区学生総合体育大会、８月に全日本薬学生剣道大会、東北薬科大学剣道部ＯＢ会、11月に卒業生歓送会、昇級・昇段審査が行われる。従って、冬場から春に向け体を慣らす基礎練習をじっくり行い、春先からは、大会に向けた試合形式の練習も盛り込むという流れだ。

学業と部活、そしてプライベートと忙しい彼らだが、「運動部に属さない人より体力があると実感している。精神的な面で少しタフだと思います」と一條さん。実際、09年度の全日本薬学生剣道大会は、期末テスト終了の２日後の開催と超ハードスケジュール。それまでの２週間は試験期間。試験の約１カ月前から部活は休止だ。にもかかわらず、この数年は男女とも上位３位程度はキープしている。学業面でも高いレベルを維持しているそうで、その体力と集中力は、日頃の練習成果といえよう。

さかのぼれば、10年ほど前から女子団体は薬連で６連覇を果たし、この３年間ほどは、男子団体が優勝２回、準優勝１回、女子団体も優勝１回、準優勝２回という好成績。

４年間を振り返って、一條さんは「剣道部の活動を通じて、各学年の役割を意識するようになった。家の中での役割もあると気づき、視点が変わりました」という。

阿保くんは主将を務めただけに、「個人の意見を強く出してくるので、皆をまとめるのが非常に難しかった。でも、やんわりまとめました。緩く……（笑）」と、しなやかな強さがにじむ。

学生を見守る佐々木顧問は、「剣道をやる子は強気ですが、みんな礼の心がある。人に対して優しく、思いやりがある。実は大会で勝つことが目標とは思っていません。そういう思いやりの気持ちを持つ子が増え、後輩に伝えてくれれば、部活の意味がある。その伝統を守っていきたい」と語る。薬学における医療人教育が叫ばれているが、部活が既にその役目を果たしているようだ。

阿保くんたちは、４年次で主将などの要職を退き、ほぼ“隠居”の身。しかし、これは４年制学部時代のスタイル。今後、５年次以降も大会に参加するか否かなど、６年制での部活のあり方は模索中だという。

年限が延長され、キャンパスライフにも余裕が出てくると思いたいが、４年次での共用試験、５年次の長期実務実習など、薬学教育が始まって以来の試練の真っ直中にいる。「年限延長のゆとり」は、なかなか得られそうにない。

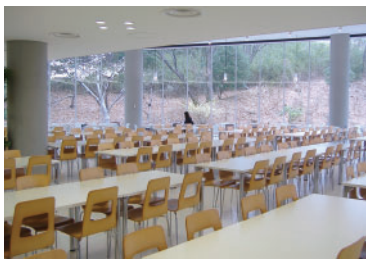
とはいえ、頑張れ、“新薬剤師”。

東京薬科大学　新学生会館が一部完成

東京薬科大学の新しい学生会館が一部竣工し、新年度から学生の憩いの場として利用されている。引き続き、既設の旧食堂や売店部分などの改修に取り組んでおり、今年9月には売店、コンビニ、談話室、自習室などもリニューアルされ、新学生会館として生まれ変わる予定だ。

完成したのは新しい食堂。旧食堂は600席しかなかったが、新食堂は２階建てで、屋外の100席を含め1200席と倍増した。山側の側面は、天井から床まで全面ガラス張りとし、ゆとりある快適な空間となった。

東薬大では、薬学６年制に対応すべく、教育施設などキャンパスの整備を進めている。昨年９月に教育５号館が完成したことから、次いでキャンパスライフの充実を図るため、学生会館の新改築に着手したもの。今後は、総合教育研究棟（仮称）の建設にも取り組んでいく。



完成した1200席の食堂